三世浅草庵としての黒川春村(補遺)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1329

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

三世浅草庵としての黒川春村（補遺）

石川　了

一

幕末の国学者である黒川春村は、浅草市人（姓、大垣）、大垣守舎（前号浅茅庵）に続く三代目の浅草庵を称した狂歌作者でもあり、また著名な蔵書家[1]としても知られている。国学者としての春村研究はさておくとしても、狂歌作者としてはその基礎的調査すらなされていない。そこで拙稿「三世浅草庵としての黒川春村」（隔月刊「文学」第八巻三号、平成十九年三月。以下、前稿と略称する）でそれを試みたが、浅草庵代々における位置づけ等をも視野に入れたため、肝心な春村の詳細を報告する紙幅がなくなってしまった。ここに別途、新たに補遺と題して報告する所以である。

最初に、前稿で報告した略伝事項についてまとめておく。春村は寛政十一年六月九日の出生、幼名勘吉、通称を治平また別に次郎左衛門ともいい、後に主水と改めた。号して芳蘭、葵園、薄斎とも称した。狂歌分野では、守舎だけでなく市人にも師事（文政三年の市人没時、春村二十二歳）した壺側（代々の浅草庵一派の総称）の一員で、初め本蔭[2]と称して随日園とも号した。また守舎が天保元年四月に五十四歳で没した翌年には浅草庵号を継いでその三世となり、都草園、壺々

亭の別号も用いた。浅草田原町に住む陶器商だったが、文政九年二十八歳の時に家業を弟に譲って別家、田原町三丁目にあったその別家から嘉永四年十一月に本所小泉町に転居、さらに本所大徳院前に移って（時期不明）慶応二年夏に発病、同年十二月二十六日に享年六十八歳で病没、浅草新堀端の永見寺に葬られた。なお以下論述の都合により、一部前稿と重複する記述があることを前もってお断りしておく。

一

春村の狂歌活動については、浅草庵号を継ぐ前のいわば前期活動期と、三世浅草庵期に大きく二分できる。まず前者から述べることとする。

管見のうちでは、以下の十五種の刊本にすべて「随日園本蔭」の狂名で入集していることが確認できた。なお、原本の所在が確認しづらいものに限り、その現所蔵者名を記載しておく（以下同じ）。

①浅草庵守舎・浅紅園勝海編『狂歌隅田川名所図会　東岸之部』　文政六年八月刊

「浅草庵のあるじ　大垣守舎」自序。春翠園蔵板。

②浅草庵守舎編『狂歌続伊勢海』初編　文政七年正月序

「文政七とせのむつき　浅草庵」自序。早稲田大学中央図書館蔵。

③浅草庵守舎編『狂歌千歳友』　文政七年八月刊

「文政七とせのはづき　浅草庵大垣守舎」自序。出羽米沢・浅翠庵蔵板。

④浅草庵守舎・千種庵口網諸持編『狂歌武蔵野百首』　文政七年十月開巻

浅草庵自序、諸持自跋。浅草庵蔵板。

⑤浅草庵守舎・茅花園編『狂歌こぞのしをり』　文政八年八月序
「文政八とせといふ年はづき　茅花園のあるし太桃白記」自序。催主は茅樹園丈枝・茅右園盛枝。前年九月十二日没の上毛人・桃の花枝追善集。

⑥浅草庵守舎等五人編『狂歌吉原形四季細見』[3]　文政八年冬刻
八島貞岡（岳亭）画。花笠連蔵板。

⑦浅草庵守舎編『狂歌続伊勢海』二編　文政八年刊
早稲田大学中央図書館蔵。

⑧浅草庵守舎編『狂歌続伊勢海』三編　文政九年刊
早稲田大学中央図書館蔵。

⑨浅草庵守舎編『狂歌坂東太郎』　文政十年三月開巻
開巻年月は旧蔵者の書込みによる。刈谷市立図書館村上文庫蔵。

⑩浅草庵守舎等九人撰『三才月百首』　文政十二年四月行成
浅草庵自序。春友亭蔵板。

⑪浅草庵守舎・湖濤園・臥竜園編『狂歌真木柱』　文政十二年十一月開巻
「文政十二年の冬　千種庵（諸持）」序。春友亭蔵板。

⑫千種庵諸持編『狂歌六帖題苑第一帖』　刊年未詳
諸持が④の跋文でこの度二世千種庵を継いだと述べているので、④と同じ頃の刊か。大妻女子大学図書館蔵。

⑬浅庭庵竜海・浅哲庵秋住編『狂歌花の錦』　刊年未詳
内題「上野高瀬鳳来山奉納／四季花」。浅草庵（守舎）序。浅草庵（守舎）撰の当座「浅草庵老師待請」を含む。催

主は上野高瀬・稲城連。無窮会平沼文庫蔵。

⑭浅草庵（守舎）編『新草狂歌集』上　刊年未詳

所見二本とも、外題・内題ともに「上」と付記されている一冊本。「下」は未刊か。

⑮浅草庵（守舎）・文車庵編『狂歌東都見立八景』　刊年未詳

泉涌成・北渓画。

他にも確認漏れが少なくなかろうが、一見して気づくように⑫と⑬以外はすべて、師である守舎の編撰書である。いささか補足しておくと、①は守舎が郷里の上野国大間々から江戸に出て最初に編んだ狂歌集と思われ、江戸で二世浅草庵の襲名披露を行った文政六年三月を過ぎること五箇月後のものである。春村の詠は隅田川や木母寺、梅若塚等を題に計十六首が入集している。時に春村二十五歳で、守舎が二世浅草庵となった後、もちろん初代浅草庵の市人から続く縁もあったろうが、真っ先に二世の門下となった一人と思われる。

いま一つ注目しておきたいのが、守舎の二世浅草庵としての月並会成果である②・⑦・⑧の『狂歌続伊勢海』全三編である。初編である②の守舎序に、「師（市人）のいせの海[4]にならひて、月なみのすりまきをあはせて、とぢぶみになさむとす。さるはまづことしを初編、くるとしを二編となして」云々とあり、その計画を実行したものがこれである。各編とも末尾近くにそれぞれ本蔭撰の当座があって、春村もまた精力的に参加していたことが窺える。春村が判者となった時期は特定できないが、この当座担当は春村が早くも頭角を現していたことを物語っていよう。

ところで、随日園本蔭とは別に「随日園勝良」なる東都の狂歌作者がおり、浅茅庵（守舎）編(a)『狂歌七題集』（文政四年十月開巻。催主は上野大間々・壺弓廬有竹。大妻女子大学図書館蔵）、万歳逢義編(b)『あさくさ〳〵』（文政四年冬蜀山人序、同年極月松桜高人序、正学坊明風跋。市人の一周忌追善集）、浅茅庵編(c)『連名披露狂歌合』（壺泉楼竜海序〈序中に「うまのとしの春」とあるから、文政五年春であろう〉。催主は上野桐生・五百機連。大妻女子大学図書館蔵）、浅黄

堂染人編(d)『鬻』[5]（同六年二月開巻。催主は上野桐生・万歳連。東北大学狩野文庫蔵）、それに②と六樹園・浅草庵守舎等六人撰(e)『狂歌新撰花鳥風月集』（六樹園自序、守舎自跋。壺月堂市住輯。同七年九月刻）の計六書にその名が見え、以後は見当たらなくなる（②のみに二人の随日園が並出することは後述する）。さらに紛らわしいことに、「正木勝良」なる人物が市人判(f)『あさけの霜』（文政三年霜月万歳亭逢義序。催主は真砂庵。桑楊庵千則の一周忌追善集。大妻女子大学図書館蔵）、浅草庵（市人）編(g)『狂歌浅草集』（書名は書題簽による。「大間々　浅茅庵」も入集）、浅茅庵編(h)『狂歌蓬の露』（同四年六月開巻。正木勝良判の当座をも含む。催主は上毛桐生・青柳総連。桐生の壺瓶楼万丸追福集。早稲田大学文学研究科図書室蔵）、万歳逢義編(i)『あさくさ〳〵』（前出）、燕栗園千穎編(j)『新玉帖』（同十二年刊）[6]の五書に入集しているのを偶目した。[7]そこで双方に関わる(b)(i)『あさくさ〳〵』を改めて検討してみると、国別編集となっている同書においては、随日園本蔭は見当たらず、正木勝良は「出羽米沢」の部にその名があり、随日園勝良と正木桂長清こと末広庵長清はともに「東都」の部に入集している。つまり正木勝良、随日園勝良、正木桂長清の三人はいずれも別人ということになる。ならば随日園勝良が随日園本蔭である可能性はきわめて高く、①が文政六年八月刊であることもを考慮に入れれば、春村は市人門人となって以後文政六、七年の交に、それまでの随日園勝良から随日園本蔭と改称したと考えるのが最も妥当と思われる。こう考えれば、翌七年睦月序の②に二人の随日園が入集していることへの説明もつく。また『あさくさ〳〵』における追善狂歌「今よりは歌よむこともかたをかやあはれまなびの親なしにして　随日園勝良」も、市人に師事すること短くして死別した春村の詠と理解すれば納得もできよう。この随日園勝良が本蔭に先行する春村の初号だとすれば、この追善歌が管見版本中の春村初出歌で、その座像もすでに(e)に見えていることになる。なお、春村は三世浅草庵襲名後に「本蔭」の狂名を上野国津久田の壺翫楼池田守瓶に譲っている（『草庵五百人一首』）。

三

守舎が没した翌年の天保二年二月二十日、春村は勧進役としてその追福会を開催し、一箇月後の三月二十日に浅草庵三世の襲名披露（題「吉野」）を壺側恒例の浅草並木町の巴屋で行っている（『壺すみれ』）。時に春村三十三歳で、守舎が二世襲名時四十七歳だったことを思えばずいぶん若い。

さて、次に三世浅草庵期における春村であるが、その編撰韻文集の刊本をまず左に列記する。その数は(ア)から(ク)までの二十八点である。

(ア)狂歌遅速五十題（内題）　狂歌　半紙本・一冊　天保元年十月刊　都草園蔵板

浅草庵黒河春村編。「天保とあらたまれるはじめの年　千種庵のあるじ勝田諸持」序。大妻女子大学図書館蔵。

(イ)芳雲狂歌集（内題）　狂歌　半紙本・一冊　天保二年三月序刊　蔵板者名不記載

浅草庵春村編。「天保二年弥生廿日　黒河春村」序。歌題「吉野」。

(ウ)名所狂歌集　狂歌　半紙本・二巻二冊　天保四年正月以前刊　浅草庵蔵板

浅草庵春村編。浅草庵序。各巻冒頭に集中作者一覧を付す。また巻二の巻末に付載された天保四年正月付「浅草庵蔵板書目」には、「草庵五百人一首　美濃本三冊　近刻」「遅早五十題　一冊　出来」「怜野狂歌集　二冊　出来」「名所狂歌集　二冊　出来」「草庵狂歌集　二冊　近刻」（これのみ未見）とある。九州大学富田文庫蔵。

(エ)怜野狂歌集　狂歌　半紙本・二巻二冊　天保四年正月以前刊　浅草庵蔵板

所見二本とも上巻（春・夏の部）のみで下巻未見。浅草庵春村編。上巻にある「目録」によれば、未見の下巻は、秋十八題と冬八題から成る。なお、刊行年次と蔵板者名は(ウ)の「浅草庵蔵板書目」による。

(オ)草庵五百人一首[8]　狂歌　大本・三巻三冊　天保四年十二月凡例刊　浅草庵蔵板

黒河春村編。「天保癸巳冬十一月　錦園天野好之」漢文序、千種庵のふた世のあるじ口網諸持和文序。「天保四年十二月　黒河春村」凡例。各巻冒頭に計二五〇名の略伝を掲げ、本文は半丁単位で一名の肖像画とその詠一首を掲載する。墨印肖像画の画者名不記載。なお、蔵板者名は(ウ)の「浅草庵蔵板書目」による。

(カ)三十六番狂歌合　　狂歌　大本・一冊　　天保五年春刊　　池廼屋蔵板

黒川春村編。千種庵勝田諸持判。天保四年二月十二日興行。「天保四年二月　黒川春村」序、「天保四とせの春　千種庵諸持」の後書き。右序によれば、近江日野の池廼屋こと外池真澄と相談して同国小椙百枝に筆をとらせたという。参加者は左右各十八名（左方には、春村と妻の綾刀自も参加）で、題は「閑居の鶯」と「旅宿花」各十八番。末尾に「天保五年二月　黒川春村」序の愛竜（伴蒿蹊弟で真澄の師）と真澄の和歌を付す。大妻女子大学図書館蔵。

(キ)柳巷名物誌　　狂歌　大本・一冊　　天保五年五月刻　　浅草三世蔵板

浅草庵春村編。村田本成輯。「天保の五とせといふ年さつき、そこのあたり程遠からぬ草の庵に春村」序。当座は柿園本成撰。淡彩刷り挿絵は加保茶宗園文楼（文楼ひと演）画。版下は川佐広好、彫工は朝倉楼雄。吉原の名物や調度、風物や風俗等の詠を収む。

(ク)春秋聯語集　　狂歌　半紙本・一冊　　天保五年十一月刻　　蔵板者名不記載

浅草庵春村・千種庵諸持・燕栗庵千穎編。榊園土雄・千束庵章雄輯。東北大学狩野文庫蔵。

(ケ)紅叢紫籙　　狂歌　半紙本・一冊　　天保六年七月刻　　蔵板者名不記載

黒河春村（左方）・村田元成（右方）編。春村添詞。勝田諸持序。文楼浅茅生輯。当座は勝田諸持撰。彩色刷り挿絵は鈴木其一画。版下は川佐広好、彫工は江川道守。花を題とする。

(コ)倣古追詠　上巻　　狂歌　半紙本・一冊　　天保六年七月序刊　　蔵板者名不記載

所見二本とも上巻のみ（下巻未刊か）。黒川春村編。「天保六年七月　黒河春村」序。画者不明の淡彩刷り人物像を収

む。人物像入りの『集外（三十六）歌仙』を元に、その半数を採り上げて編んだもの。大妻女子大学図書館蔵。

(サ)着到十首　和歌　半紙本・四巻四冊　天保七年刊　蔵板者名不記載

黒河春村編。春夏秋冬の四巻。春の当座は池田市万侶・向後河鳥・河合岑雄の各撰、夏の当座は高橋広道・桜井光枝の各撰、秋の当座は新井守村・佐分網造・日下菊村の各撰、冬の当座は村田元成・土屋正臣の各撰。なお、刊年は各原題簽に刻されている。

(シ)羽族類題　和歌　大本・一冊　天保八年二月刻　浅綾庵（外池真澄）蔵板

黒河春村・浅綾庵外池真澄編。「天保八年正月　黒河春村」序、浅綾庵のあるじ外池真澄跋。当座は加藤蔭直撰。鳥を題とする。架蔵。

(ス)江戸名所図会　前編　狂歌　半紙本・一冊　天保八年四月刻　千束庵蔵板

内題「江戸名所前編」。後編未刊か。浅草庵春村・花の屋光枝・千種庵諸持編。淡彩刷り口絵は二世柳川重信画。大妻女子大学図書館蔵。

(セ)奉額普光集（内題）　狂歌　半紙本・一冊　天保九年九月刻　下総印西松崎邑・呆下亭蔵板

尾題「俳諧歌普光集」、添付の甲乙録題「普光集」。浅草庵春村・華笑百合満・千束庵章雄編。墨印挿絵は国直画。甲乙録によれば催主・呆下亭知永。架蔵。

(ソ)淡海名寄　初編　狂歌　半紙本・一冊　天保九年九月刻　近江日野・浅稲庵蔵板

黒河春村編。「かくいふは、このうたえらべる大江戸の浅草人、草の屋の春村、天保九年九月九日、きくのさかづきとりかはすけふのしるしに、酔人めかしてしどけなきことゞもをかくなん」序。この序によれば、近江国の西田正芳輯。淡彩刷り挿絵は相覧画。彫工は朝倉伊八。大妻女子大学図書館蔵。後編（第二編相当）は天保十二年十一月刻。

(タ)狂歌百才子伝　狂歌　半紙本・一冊　天保九年冬以前刊[9]　千蓋庵・千束庵梓

内題「百才子伝」。春夏之部は浅草庵春村編で当座は在江戸の槐床幸世撰、秋冬之部は檜園梅明編、恋雑之部は千種庵諸持編で千蓋庵出府待受会は千蓋庵松雄撰。冒頭に才子三十六人のやや詳しい伝を付す。墨印挿絵は雪鶯画。大妻女子大学図書館蔵。

(チ)摭葉大成　韻文集　半紙本・五巻一冊　天保十年春序刊　千束庵蔵板

巻一「和歌」・巻二「雑体」黒河春村編、巻三「狂歌」桑楊市万侶編、巻四「詩」無絃編、巻五「俳諧」雪中庵対山編。「てんほうのとゝせといふ春　さいたま人黒沢翁満」序。また巻四「詩」本文前に「天保戊戌四月　無絃」漢文序を付す。

(ツ)二藍源氏　狂歌　半紙本・一冊　天保十二年八月刻　千束庵蔵板

内題には「前編」と付記されているが、原題簽には「完」とある。浅草庵春村・千束庵章雄編。当座は柏唸社広善撰。墨印挿絵は画者名不記載。各題は『源氏物語』の各巻名を明示した上で、そのゆかりの題を掲げる。九州大学富田文庫蔵。

(テ)淡海名寄　後編（内題）　狂歌　半紙本・一冊　天保十二年十一月刻　近江日野・浅稲庵蔵板

黒河春村編。「天保辛丑仲冬之日　小林元儁」漢文序。この序によれば、近江日野の外池真澄輯。淡彩刷り挿絵は隣春画。彫工は朝倉伊八。巻末に「前編追詠」として、真澄の詠八十三首他を追記する。架蔵。

(ト)鳴月集　狂歌　半紙本・一冊　天保十三年四月序刊　大間々・浅鍾庵美雅集冊

浅草庵春村編。「天保十三年四月　黒河春村」序。この序によれば、本書は当地出身の二世浅草庵守舎十三回忌追善集。当座は浅白庵照庭・浅橘庵正芳・浅紫園広道・壺亭窓守村の各撰。同年四月一日大間々・豊田亭開巻、集冊持は同地浅鍾庵美雅（序にいう近江から当地へ旅移りして久しい「岡島よしまさ」であろう）、催主は同地六蔵亭祐村。大妻女子大学図書館蔵。

(ナ)歳時記図会　初編上　狂歌　半紙本・一冊　弘化三年正月刻　三玉堂[10]蔵板

内題「歳時記図会春之部上」。千種庵諸持・六朶園二葉・花屋光枝撰の部と、浅草庵春村・文字楼元成・燕栗園千寿撰の部から成る。当座は六帖園正雄・六橋園渡の各撰。「弘化三年むつきついたち（中略）つばき園の春村」序。考証は八文舎自笑。淡彩刷り口絵は玉蘭斎貞秀画、採筆は春翠園百枝。大妻女子大学図書館蔵。

(ニ)花月遊吟　狂歌　半紙本・一冊　年次不明　蔵板者名不記載

浅草庵春村・浅裏庵広好編。当座は渚梅園船盛撰。墨印挿絵は画者名不記載。大妻女子大学図書館蔵。

(ヌ)五葉狂歌集　狂歌　半紙本・一冊　年次不明　蔵板者名不記載

浅草庵春村・青雲亭光海・千数庵好材・青松園磐村編。黒河春村序。

(ネ)彩霞集　和歌　半紙本・四巻四冊　年次不明　蔵板者名不記載

黒河春村編　春夏秋冬の各巻から成る。

(ノ)三玉秋貺　和歌　半紙本・三巻三冊　年次不明　蔵板者名不記載

黒河春村編。上巻は題「秋風」で長嶋松守撰の当座、中巻は題「秋野」で村田元成撰の当座、下巻は題「秋恋」で前二巻の追加と大江章雄撰の当座から成る。架蔵。

(ハ)新柳風姿　和歌　半紙本・四巻四冊　年次不明　蔵板者名不記載

黒河春村編。春夏秋冬の各巻から成る。春の当座は津田琴繁・春湖法師の各撰、夏の当座は勝田福寿・富永永世の各撰、秋の当座は宮下道守・大江章雄・日下菊村の各撰。冬の当座は池田本蔭・川佐広好の各撰。夏の巻一冊は茶梅亭文庫蔵。

(ヒ)草蘆集　和歌　半紙本・四巻四冊　年次不明　蔵板者名不記載

黒河春村編。春夏秋冬の各巻から成るが、夏冬の巻未見。

(ヲ)波奈加多美　　和歌　半紙本・四巻四冊　　年次不明　　蔵板者名不記載

黒河春村編。春夏秋冬の各巻から成る。

四

右の春村編撰韻文刊本について、若干の補足説明をしておきたい。(ア)は浅草庵三世を襲名する以前のものだが、諸持の序中で、守舎が編集完成前に没したために春村がその遺志を継いだという。浅草庵蔵板とはせず、あえて都草園蔵板となっているのはこのためであろう。(イ)は春村序中に、「春村、浅草庵の跡つぐことゝなりにたれば、そのよし、をちこちにきこえんとて、かう歌合はものしつれ」といい、所収歌はすべて吉野を題とする。すなわち、天保二年三月二十日に浅草並木町の巴屋で行った、浅草庵三世襲名披露会の成果がこれである。末尾に収まるその詠は、「山もせにさくやさくらの色ふかみよし野は雲もたちばなからん　春村」である。また(カ)・(シ)・(ソ)・(テ)・(ト)などからして、春村の勢力は西では近江が拠点だったようで、特に同国日野の池廼屋こと浅綾庵外池真澄は、その中心人物だったと思われる。国学者らしい春村の考証癖は、狂歌分野でも(コ)や(ソ)(テ)・(ナ)に表れている。(コ)は画像入りの『集外（三十六）歌仙』を元に、その半数をとり上げて編んだもので、東常縁から木下長嘯子まで十八名の像に漢文の略伝を付すとともに、各題とも、その題に関わる十八名の内の一名の和歌一首をまず記し、次いで同題で詠んだ面々の狂歌を掲げる。巻末には各題の選外狂歌をまとめて掲出した後、その十八名に対する面々の狂歌賛を付す。前後編から成る(ソ)(テ)は近江の地名を題にしたもので、画中に『日本書紀』や『元亨釈書』等から関連箇所を引用する他、各題においてもまず冒頭に、『万葉集』や勅撰集等からゆかりの和歌一首を配置する。(ナ)も類似の趣向で、「四方拝」「雑煮」等の各題冒頭に八文舎自笑によるその題に関する考証を付す。なお(ナ)によって、春村は弘化期に入っても狂歌活動をしており、別途「つばき園」とも号していたことが確認できる。

ところで右の諸書の内には、天保六年の江戸旅行中に春村に入門し、弘化三年秋に浅草庵四世を継いだと思われる尾張熱田の笠亭仙果こと高橋広道の入集書もある（ケ・サ・ソ・チ・ツ・ト・ハ・フ）。この四世については、かつてまとめたことがある[11]上に前稿でも触れたので、新知見のみを記す。(ソ)『淡海名寄』初編の一本が無窮会神習文庫に所蔵されているが、それに添付されている甲乙録に「尾張熱田　壺菫園広道」とある。また新出資料の(ト)『鳴月集』には、「熱田　広道」として入集するだけでなく、当座として「夏夜夢　浅紫園広道撰」の部がある。その当座末尾歌が熱田の広道詠であることからして、「浅紫園」は「壺菫園」とともに仙果の新たな別号と判明する。なお、守舎十三回忌追善の(ト)で当座を担当しているということは、催されたその時に仙果も大間々にいたことになるが、事実その通りで、仙果が天保十三年三月に四度目の江戸旅行をした折の紀行文『おもひのまゝの日記補遺』[12]に、四世襲名の下相談をも兼ねて桐生や大間々に出かけたことが見えている。

話題を春村にもどし、他編者狂歌本への送序活動と春村肖像画等について偶目したものを列挙しておくと、上毛の浅葎庵（富永）永世編(A)『上野歌枕』（大本一冊。玉川大学図書館蔵）に「天保のいつとせといふとしさつき（中略）春村」序、同国壺高窓（新居）守邨編(B)『狂歌高友集』（半紙本一冊。春村座像を掲載）に「天保五年六月　浅草庵」序、桜井光枝編(C)『春葉集』（半紙本二巻二冊。春村座像を掲載）に「天保六年三月　黒河春村」序、千種庵勝田諸持編(D)『豊穂集』（半紙本一冊。天保六年五月当座。自序中に桜井光枝輯という。春村座像を掲載）、文字楼元成・遊女浅茅生編(E)『柳花集』（半紙本一冊。天保八年三月刻。高橋広道も入集。大妻女子大学図書館蔵）に「天保七年九月　薄斎春村」序、千束庵章雄編(F)『四方の海』（半紙本一冊。天保十一年六月刻。千蓋庵・千宝庵梓。略画風春村像を掲載。大妻女子大学図書館蔵）に浅草庵翁当座、などがある。また高橋章則氏『江戸の転勤族』（平凡社選書、平成十九年刊）によれば、『興歌喚友集』（陸奥桑折・愚鈍庵一徳の改号披露集）のチラシに「天保十一年三月　薄斎春村」の一文があるといい、二世立川焉馬編の初代焉馬十三回忌追善集『春駒』（天保六年夏序刊。九州大学富田文庫蔵）には、「はなちらし雪をふみけつ春

駒も世のはかなさをしらせがほなる　浅草庵」の一首がある。なお、前稿でも引いた春村の「黒川」姓は、管見韻文刊本では(カ)・(コ)以外はすべて「黒河」である。

最後に従来、三世浅草庵春村著とされる『歌道手引種』について前稿を補訂しておく。この書は『清話抄』（半紙本二巻二冊。以下、元本と略称）の改題本『歌諧岱』（半紙本三巻三冊。以下、改題本甲と略称）を、さらに『歌道手引種』と改題（半紙本三巻三冊。以下、改題本乙と略称）したものである。ノートルダム清心女子大学附属図書館所蔵黒川文庫本と架蔵の元本は見返しに記載がなく、「浅草庵」序、内題「清話抄巻之上（下）」、尾題「清話抄巻之上畢（下畢）」、柱題「清話抄」、丁付は序「一」～「四」、本文巻上「壱」～「四十三」、同巻下「四十四」～「八十五尾」、その最終丁ウには「浅茅庵蔵板」とあり、序文を含む全丁に匡郭がある。奥付には「清話抄後編　嗣出」の予告と、文政三年夏・三都四店発行の刊記がある。改題本甲（国立図書館蔵本）は元本二冊を三冊に改編（巻中の丁付は「廿七」～「六十」）した上で、元本にあった巻上内題のみを「歌諧岱」と入木訂正し（他の内題と尾題はすべて削除して空行）、柱題もすべて削除して奥付もない。しかしこの段階では、まだ最終丁ウの「浅茅庵蔵板」が残っている。さらに改題された改題本乙(1)（射和文庫蔵本。巻中〈丁付「廿七」～「六十」相当〉欠の二冊）では、初めて見返しが付されて「浅草庵大人輯／歌道手引種／江都　向陽楼（野村新兵衛）蔵」とあるものの、内題と尾題は皆無で（すべて空行）、最終丁ウの蔵板者名も削除した上に、匡郭も序文丁のみ削除、奥付は弘化四年正月・江都六店発行の刊記のみとなる。改題本乙(2)（大妻女子大学図書館蔵本）はその刊記を年次記載なしで三都十店列挙に改めたもので、その板木が京都に移ったものが改題本乙(3)（国立国会図書館蔵本。巻中の丁付は「三十二」～「六十」。巻下末に板元の蔵板目録一丁を付す）で、見返しを飾り枠付きで「浅草庵輯／歌道手引草（ママ）／謙々舎蔵板（朱印「横田／蔵板」）」と改め、奥付も皇都書肆・俵屋清兵衛（横田謙々斎）に改めている。つまり改題本乙(1)から浅茅庵の名が消えたために、見返しや序者の「浅草庵（大人）」が特定できなくなり、天保期の浅草庵こと春村の著と誤解されたのであろう。浅茅庵蔵板で文政三年夏（市人没の半年前）刊の元本以下すべて

に備わる「浅草庵」序によれば、東都流行の狂歌を学ぶ手掛かりすらないと嘆く山里の者の求めに応じ、浅草庵が諸書から集めておいたこの一巻を与えたという。求めた山里の者が蔵板者でもある上野国大間々の浅茅庵守舎で、応じた浅草庵がその師である市人と解釈して間違いなく、改題本乙(1)見返しの「浅草庵大人輯」もこれを裏付ける。その編著者については、正確には「市人輯・守舎編」とすべきであって、春村は一切関与していない。

注

(1) 春村とその養子・黒川真頼が中心となって収集した蔵書書目は、近年になって柴田光彦氏『黒川文庫目録』二冊（『日本書誌学大系』八十六。青裳堂書店、平成十二、十三年刊）として、その本文と索引が公刊されている。

(2) 前稿では、『草庵五百人一首』に「初曰本蔭」とあるのを「初、日本蔭」と誤解し、「ひのもとかげ」と振仮名まで付けてしまったが訂正しておく。正しくは「初曰、本蔭」である。なお注（8）参照。

(3) 影印と翻刻が小林ふみ子氏『絵入吉原狂歌本三種』（『太平文庫』四十九。太平書屋、平成十四年刊）に収まる。

(4) この市人編『狂歌伊勢海』を初めとして、前稿時未見だった市人と守舎関係諸書について、その後知り得た所在等をこの場を借りて報告しておく。市人編『狂歌伊勢海』初編（半紙本二巻二冊で寛政期蔦屋重三郎刊）と同編『古今狂歌集』（大本二巻二冊で文化六年山中要助等刊。内題「戯言夷歌集」）は、小林ふみ子氏のご教示によりともに法政大学附属図書館所蔵。また中野真作氏のご教示により、同編『狂歌三愛集』（半紙本一冊で文化期刊。北斎画）は同氏の茶梅亭文庫所蔵、千種庵霜解編『狂歌満玖能宇智』（享和二年自序。山中要助等刊）については、すでに同氏「狂歌本目録（二）」（関西大学第一中・高校「研修」第二十五号、昭和五十四年五月）に報告があった。

(5) この末尾に添付された浅茅庵名の摺物によれば、故市人が早くに許していた染人の浅号「浅黄堂」を改めて披露した上野桐生の書で、披露としての開巻に追加して、その一箇月後に同所浅桐庵で行われた浅草庵（守舎）撰の当座を付す。

(6) 刊年は『江戸狂歌本選集』第十二巻所収本の延広真治氏解題による。なお『新玉帖』での同人国（所）付は「陸奥仙台」となっている。

(7) さらに遡れば、寛政期の『狂歌部領使』（同四年頭光序）に入集し、『歌狂晴天闘歌集』（同八年同人序）に尽力した人物として「正木桂長清」がいるが、活動時期が早すぎるのでこれが春村であるはずがない。小林ふみ子氏のご教示によれば、桂長清は伯

楽連、後に浅草連の主要人物の一人として富士見連を率い、末広庵とも称したという。

(8) この春村編『草庵五百人一首』は壺側狂歌作者に関するきわめて有益な資料なので、各肖像画を含むて全文を拙稿「三世浅草庵黒川春村の門人たち—解題・翻刻『草庵五百人一首』付、人名索引—」(「大妻女子大学紀要—文系—」第四十号、平成二十年三月)に紹介した。

(9) 中野新作氏のご教示による。同氏の茶梅亭文庫所蔵の一本は原装本で、その原見返しには旧蔵者による「天保九戌冬／飯山亭食翁」との識語がある。同氏談によれば、この旧蔵者は石原氏、阿波徳島の狂名を飯山亭喰主と称する狂歌作者で、その子孫から箱入りで入手した狂歌本の内の一本が件の一書であるという。なお、この狂歌作者は天保三年刊『狂歌阿淡百人一首』にもその名が見えている。

(10) この蔵板者は撰者の一人である文字楼(村田)元成こと三亭春馬のことで、続編は旭園輝雄編『歳時記　下巻』(半紙本一冊。至清堂序。刊年不明だが、右之方撰者の一人に四世の浅草庵広道がいる。架蔵)である。なお拙稿「江戸に下った八文字自笑の名跡—四世八文舎自笑こと三亭春馬—」(「国語と国文学」第八十巻五号、平成十五年五月)参照。

(11) 拙稿「笠亭仙果の狂歌本」(青裳堂書店「書誌学月報」第四十三号、平成三年八月)。

(12) 翻刻が「集古」壬申第一号〜五号、癸酉第一・三・四号(昭和七年一月〜五月、同八年一・三・四月)にある。